産業観光
きりゅう紀行 ⑦⓪

真夏の祭典を彩る 桐生人のソウルミュージック

八木節

夏になると何処からともなく聞こえてくる八木節の音色。夏の訪れを告げるお囃子の軽快なリズムは、高揚感を覚えずにいられない桐生人のソウルミュージックである。

上州の民謡として広く知られる八木節だが、そのルーツは200年以上前に新潟県の新保高大寺で和尚追い出しに農民たちが唄ったザレ唄にあり、瞽女[*1]や物売りなどが「新保高大寺くずし」の節にのせ各地に広めたとされている。また、道南口説節や津軽じょんがら節なども、新保高大寺節に起源を持つ八木節の兄弟である。上州には三国街道から中山道を通じて伝わり、そこから東照宮へ通じる日光例幣使街道の八木宿（栃木県足利市）で「八木節」として土着したという説が有力と考えられている。

大正初期になると、堀込源太（本名・渡辺源太郎）により、一民謡であった八木節をレコード化するなどして一躍、全国的な知名度を得るまでに発展、１コーラスを７行で唄う現代のスタイルもこの時に源太により確立された。[*2]

源太のレコーディングと同じころ、桐生では長谷川勝太郎が八木節に魅せられ普及を始める。大正５年（1916）に浄運寺境内で八木節盆踊りを開くと、その後、常木稲荷神社や織物祭りで八木節大会が開催され大きな盛り上がりを見せたという。桐生祇園、商工祭、七夕祭りと、かつては街の勢いを表すように多くの祭りが開催されていたが、昭和39年（1964）にそれらを統合して「桐生まつり」が始まり、昭和63年（1988）には「桐生八木節まつり」と名称を変えた。祇園祭と八木節が祭りの中心となり、勝太郎が普及に努めた八木節が地域に定着したことの証であった。

勝太郎の普及活動から１世紀、今年の第53回桐生八木節まつりは８月５日（金）から７日（日）まで開催される。近年、その盛り上がりがメディア等に取り上げられ、昨年は50万人を超える来場者で賑い、やぐらの周りには大きな人のうねりが生まれた。民謡でありながら疾走感ある刺激的なビートは桐生人のみならず多くの人々の魂に響き、今年も真夏の祭典を熱く彩る。

*1　瞽女（ごぜ）：全国にいた盲目の女遊芸人で、越後のごぜは得に有名であった。
*2　当時、源太が唄っていたのは、足利上加子（かみかこ）地区の念仏踊りであるとされる説もある。
参考：桐生市史別巻（桐生市）、思い出のアルバム桐生（あかぎ出版）　　写真：坂主樹哉 氏